

3. 東日本大震災復興支援フォーラム 2015

事業名	東日本大震災復興支援フォーラム2015 “復興”に寄り添う ～今までを振り返り、明日を考える～
実施日	2015年12月12日（土）13時30分～17時00分
場所	深草キャンパス和顔館 B201
実施主体／運営	龍谷大学／ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	約200名

1. 経緯・目的

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、広範囲かつ深刻な未曾有の被害をもたらしました。震災後、龍谷大学では、宮城県石巻市を中心に、2015年の10月までに15回のボランティアバスの運行を行い、(学生・教職員のべ466名が活動)、復興支援フォーラムを開催してきました(今回で4回目)。本活動の過程で、たくさんのご縁をいただき、現在に至ります。

このフォーラムでは、これまでの活動を総括すると共に、これからも東日本大震災に関心を持ち続けるために、発災直後と、現在の被災地の状況を踏まえながら、これからについて考えることを目的として開催します。



2. 概要

今回のフォーラムはセンターの学生スタッフ(以下、学スタ)中川・岡本の司会で、2部構成で開催しました。

第1部では、学スタの藤原が5年間の本学の取組について報告した後、基調講演として、『被災地の祈りの多様性』というテーマで、発災直後からの被災地に入って取材したご経験を、ドキュメンタリー作家の石井 光太氏にお話いただきました。

第2部では、伊達センター長のコーディネーターで、石巻専修大学の坂田学長、雄勝硯生産販

売協同組合の高橋氏、本学の赤松学長、そして、復興支援ボランティアに参加した学生を代表して、学スタの白土の4名でパネルディスカッションを行いました。

また、開演前、休憩時間、開演後に、石巻市雄勝町の物産品と石井氏の書籍販売を行うと共に、会場周辺で東日本大震災に関する展示と、会場内でこれまでの活動の様子をまとめたムービーの上映も行いました。

フォーラム終了後は、石井氏と学スタとの交流会を開催しました。

●スケジュール

- ①開会の挨拶 赤松 徹真(龍谷大学 学長)
- ②学生からの復興支援活動の報告
報告者：藤原 恵太(学スタ・深草副代表、文3)が、これまでの大学として復興支援の取り組みについて説明。
- ③基調講演 石井 光太 氏
テーマ：被災地の祈りの多様性
- ④パネルディスカッション
○パネラー
テーマ：“復興”に寄り添う ～今までをふりかえり、明日を考える～
・坂田 隆 氏(石巻専修大学 学長)
・高橋 頼雄 氏(雄勝硯石生産販売協同組合 部長)
・赤松 徹真(龍谷大学 学長)
・白土 奈央(学スタ・深草代表、法3)
○コーディネーター
・伊達 浩憲(ボランティア・NPO 活動センター長)
- ⑤閉会の挨拶 池田 勉(龍谷大学副学長)

※司会：中川 真実(学スタ・瀬田副代表、社3)
岡本 龍吾(学スタ・瀬田回生代表、理2)

●基調講演・講師：石井 光太(いしい こうた)氏

1977(昭和52)年、東京生まれ。海外ルポをはじめとして貧困、医療、戦争、文化などをテーマに執筆。アジアの障害者や物乞いを追った『物乞う仏陀』、イスラームの性や売春を取材した『神の棄てた裸体』、世界最貧困層の生活を写真やイラストをつけて解説した『絶対貧困』、インドで体を傷つけられて物乞いをさせられる子どもを描いた『レンタルチャイルド』、世界のスラムや路上生活者に関する写真エッセー集『地を這う祈り』など多数。



HP: <http://www.kotaism.com>

3. 参加者の声・得られた効果など

当日実施したアンケートでは、全体満足度が91.8%と非常に高い結果となりました。

- ・改めて“東日本大震災”という出来事について深く考え、向き合うことが出来た。
- ・基調講演会、パネルディスカッション共に、自分にはない視点で語って下さって目が開かれた。
- ・東日本大震災について、被災地については、当時ニュースで見たこと程度しか知らないことが多く、今回のフォーラムで、被災地のリアルを垣間見ることが出来たことは、自分の

意識を大きく変えるきっかけになりました。
 ・様々な方々の想いや現在の状況を伝えてもらい、復興支援の状況を知ることができました。こういう機会は本当に貴重なものだと思います。

等のご意見を頂きました。

4. コーディネーター所感

大変盛りだくさんの内容を限られた時間の中に詰め込んでしまったので、参加者にとってはもう少し突っ込んで聴きたい部分などもあったのではないかと思います。フォーラムを企画していく内に、あれもこれもと欲張っているいろいろと組み込んでしまい、ゆっくりとお話していただくことが出来なかったことは大きな反省です。

しかし、まだ東日本大震災は終わっていないことを再認識し、「今だからできること」、「今だから冷静に耳を傾けることが出来ること」等、たくさんの「今だからこそ…」に気づく機会をつくることが出来たのではないかとアンケートのご意見などから、そう感じています。

また、赤松学長の言葉、学生の言葉などから、大学としてこれからも復興支援活動を続けて行く想いを確認することが出来たのも、このフォーラムの大きな収穫であったのではないかと考えています。

〈報告者：竹田 純子

(深草キャンパス コーディネーター)〉